

「月都計画書」

21世紀後半、世界宇宙開発連合の全10世帯を乗せた大宇宙船は、月での生活を目論み飛び立っていった。計画地は、月面に発見されたピット（溶岩トンネルの崩壊によってできた穴）の下に広がる、溶岩トンネルの洞窟。素早く建設でき、かつ移動手段と一体となるようなプレハブ住宅が検討された。

< 月への移住 >

宇宙船には、

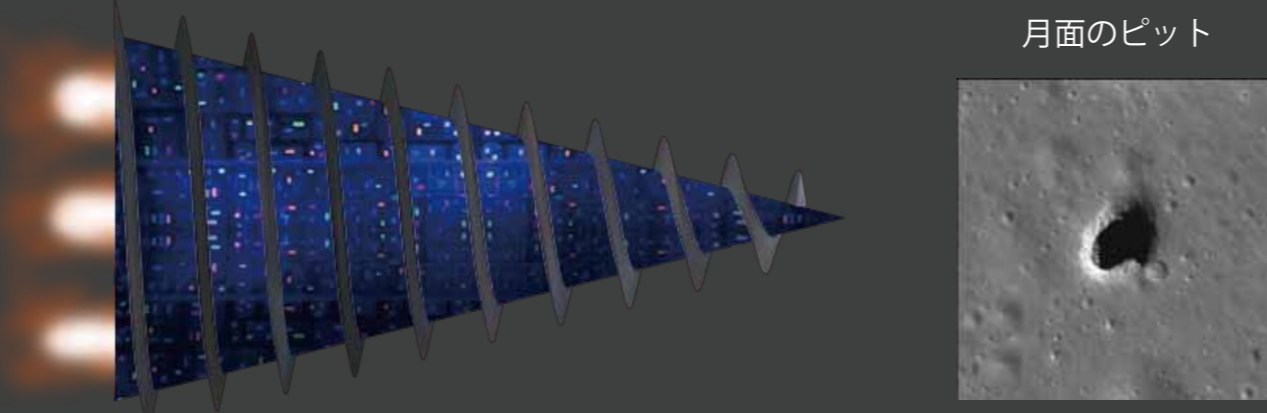
- ① 月に存在する洞窟（溶岩トンネル）に住居を造るためのプレハブ建材
- ② 月面及び洞窟移動用の球形 LRV
- ③ 生活のための十分な食糧と備品

が積み重ねられていた。
200年後の23世紀を目標に、月都計画は始まったのである。

< 宇宙船の形態 >

宇宙船は地球に帰還することを考えず設計された。

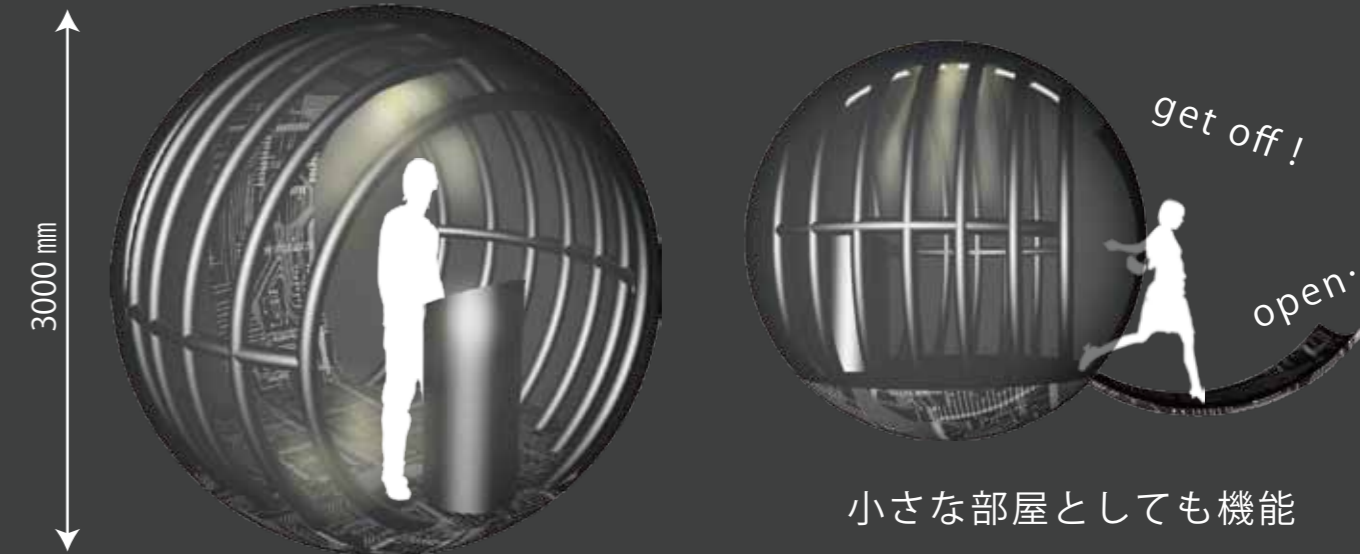
そのまま月面のピットに突き刺さることで、外部の刃は月面と洞窟を繋ぐ球形 LRV の道路となり、横側に広がる洞窟にスムーズに住居建設を始めたのだった。



< 球形 LRV とは (Lunar Roving Vehicle) >

新型の月面車。これが月での主な移動手段となる。自動運転と電気自動車の発展により完成した。

内部を機械で水平維持しつつ、外部の球体が回転することで移動する。



全10世帯の月面生活



10世帯の住居は素早く完成した。

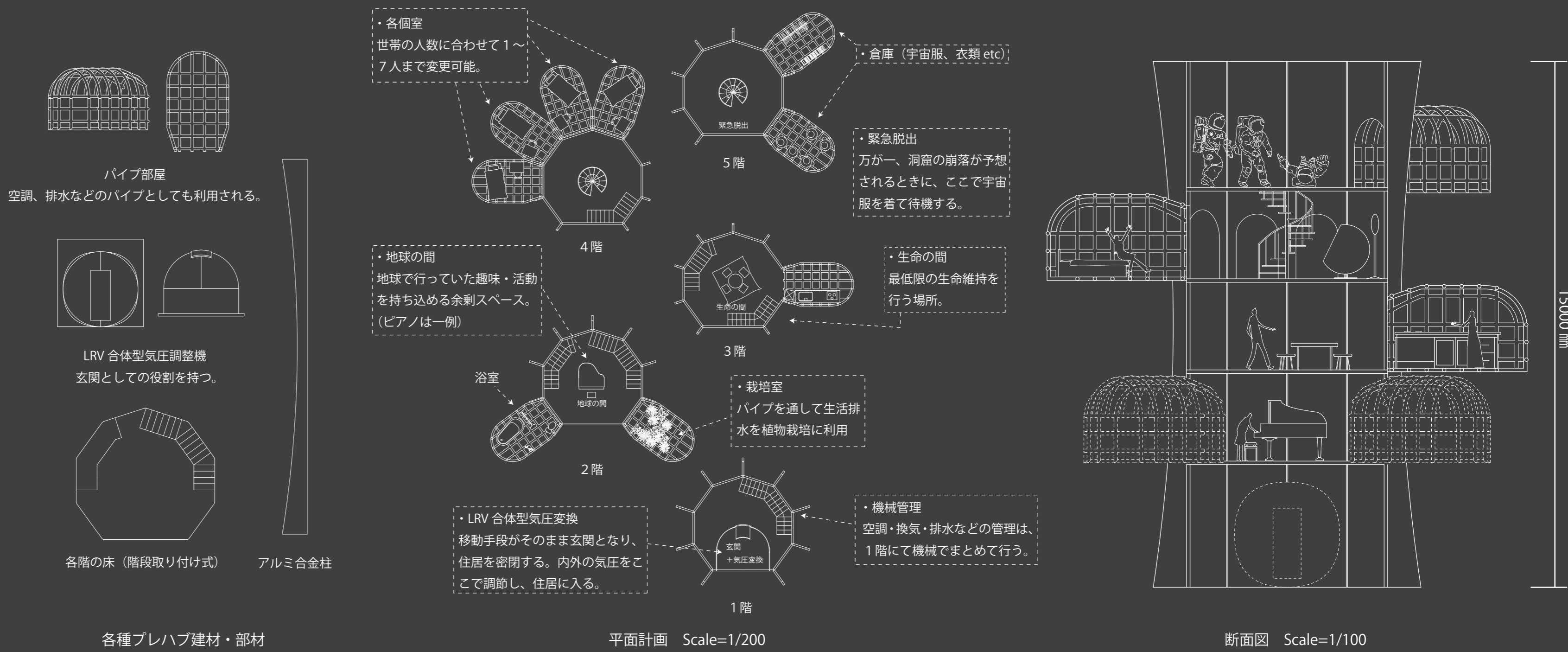
ある程度地球で作られたプレハブ建材を組み合わせるため建設が容易であり、建築知識のない世帯も自分たちで造ることができた。

地球の生活とは違い、空気のない月では地球以上に移動手段と住居が密接に関わる必要がある。

LRV が玄関として機能することで、宇宙服のような鎧を着ないライトな生活を送ることができるようになった。

また小隕石の月面衝突による洞窟の崩落を防ぐため、住居は洞窟の柱となるように設計された。

太陽光の届かない洞窟内部での生活は、移住当初は暗いものであった。しかしながら、世帯数が増えるにつれて強化ガラス製の屋根から漏れ出す生活光も増え、少しずつ洞窟を照らしていった。



一月都計画から200年後一

そして23世紀現在、月都は完成した。洞窟は居住区として、宇宙船は中枢機関として機能している。小惑星衝突により滅亡の危機にある地球を救うため、私達はこの200年前の月都計画書に倣い、新たに「地球再建計画」を提案する。

月で生まれた我々にとって、祖先の生きた地球はすべてが神話であり、青く輝く惑星なのだ。

Written by y+k architect
(yuto & kakeru)

カケルとユウトは地球を救うため、過去の文献を参照。月都計画書にたどり着いた二人は、これを現在の月の技術にコンバートすることを考えた。このシートは、その案を月都の上層部に上訴するために二人がまとめた計画の一部であり、その中でも10世帯の住居に関わる部分を抜粋した、というストーリーの元作ったものである。

